

## 里の心を伝えること

最上郡の中でもとりわけ山深い角川の里にも、多くの研究者、調査者、取材者が訪れる。筆者がこの里に住み込んでからもそうした方々がずいぶん取材に訪れた。里の人々も外部のメディアを通して映る自分達の姿には関心があるし、何より外部からの訪問者との交流には楽しさもあって、温かく対応してくれる。筆者などもその一人なのだ。

そうした取材調査者の多くはこの里の人々の暮らしの営みや声を外部に発信してくれる。筆者が所属する角川里の自然環境学校の数々の取り組みも、幾度か丁寧な取材を受けて新聞に掲載されたりテレビで放映されたりして反響を頂いたりした。多くの応援団を、メディアを通じながら不特定多数の方々にまで広げることが、一任意団体の力では到底できないことで、大変有意義なもので感謝している。

しかし、世間にあるようにすべての取材調査が、誠実に里の人々の声を伝えているというわけではないようだ。中には面白半分としか見えないような取材をしていく人もいるし、最初からストーリーが決まっていたり里の人々にそのストーリーを無理に当てはめていこうとする調査者もいる。あるいは筆者らの活動を快く思わない人がメディアと結託して陰謀めいた報道をでっち上げることさえある。近頃は筆者もその被害者の一人で大変迷惑した経験を持っている。邪な報道を企てる人々はたいてい大きなメディアや組織に属していることが多かったように思う。里の人々の方も有名な番組名や肩書きには安易についていってしまうところもある。

程度の差こそあれ、里に入り何がしかを発信しようとする人々は、彼らなりの関心事があって、それに基づいて取材し、彼らなりの方法で発信しているものだ。おのずとそこでは発信の主体は彼ら取材者であって、発信される肝心の当事者である里の人々の声は不在になりがちだ。

もちろん、マイナス面だけではない。里の人々と外部の取材者では視点が違うので、そこから新たな発見が芽生えることだってある。里の人々にとっては日常的過ぎて分からない里暮らしの価値が外部者の目を通して、里の人々が再発見するということがある。角川ではそうした形で多くの価値が発見され、地域の活動や子ども達へのふるさと学習に役立てられ、地域の活性化にもつながっているという効果もある。

だが、こうしたことも取材調査の中身が里の人々にきちんと示され、その結果が里の人々にも分かるように還元されてはじめて可能になることだ。往々にして、研究調査者の報告書は、彼らの専門用語で語られているため、里の人々には非常に分かりにくく、一方的なものが目立つ。あるいは根本的なところで里の人々が表現しようとする実相とはかけ離れた書かれ方をしているといった面もあるようだ。筆者自身も例外ではない。これまでこの紙面で伝えてきたことだって、果たして里の人々の本当の心を伝えているかといえば、必ずしもそうではなかったろうと筆者自身反省をしている。

だから、本当に里の心を伝えていくためには、やはりその土地に住み、活動している人々

自身が声を発していく努力をしていくことが大切だ。またそれは自分達だけが分かるというのではなく、外部の人々にも分かるような形で発せられるように心がけることが大切だと思う。これは筆者が角川の里に住みこみ、里の人々や外部の人々と一緒に様々な里作り活動を作り上げていく中で常に感じてきたことでもある。角川の里作りの取り組みは、確かに地域住民が主体となった活動だが、住民だけではなく、行政、メディア、企業、ボランティア、外部の参入者によるいわゆるヨソモンとの「協働作業」で生み出されてきたというのが真実のところだ。だから「新しい里の発信活動」ということを考える場合、里の人々を主体としながら、多くの人々の協働作業で多くの人々が分かり合えるような形で生み出すことができればと思うのだ。いずれにせよ、まず里の人々が外部の目線を活用しながら、この里の価値を一つ一つ見つけ出し、その暮らしの営みを行いながら、誰にでも分かるやり方で自らが活動のあり様やよさを示していくことが大切ではないかと思う。

里の活動は、手間がかかるし、苦労もある、そして複雑で説明するのが難しいということもあるかもしれない。しかし、やればやっただけ形となり充実感を味わえるということは確かだ。そこにはかかわった人々それぞれの思い入れが込められている。そのような里の心が真に発信されるようになれば、より深くそして楽しい里作りと交流活動が促進されるようになるのではないだろうか。